愛知工業大学研究報告
第37号A平成14年

ベン・ジョンソン『錬金術師』におけるGeber's Cook

Geber's Cook in Ben Jonson's *The Alchemist*

森　ゆかり
Yukari　MORI

Abstract Alchemy was still legitimate pursuits in Early Modern England. Although alchemy had been a statutory offence since 1403-4, both the state and the universities tolerated private study of alchemy as long as it did not lead to any scandalous accusations of fraud or witchcraft. Early Jacobean audience of Ben Jonson's *The Alchemist*, first performed in 1610 at the Globe, were very likely to have a mixed feeling toward alchemy, which was thoroughly caricatured in this comedy. Jonson had done an extensive research on medieval and early modern authorities on alchemy, such as Pseudo-Geber, Raymond Lull, Thomas Norton, and George Ripley, whose treatises of alchemy were available in vernacular by the end of the sixteenth century. Jonson deployed the very authorities mentioned above in order to satirize Subtle and Face, alchemical charlatans in the play, by indicating that they fit the characterizations of Geber's cook, an epithet to denote a false or ignorant alchemist who carried out erroneous experiments using urine, eggs, hair and blood, a practice unanimously denounced by Norton and Ripley. William Perkins thought there were three classes people who were likely to become witches, Catholics, learned magicians, and unlearned quacks, all of whom turned out to be the objects of satire in *the Alchemist*.

1. はじめに

ロンドンの占星術師で医者の Simon Forman(1552-1611)はその後半生を通じて錬金術研究を行ったらしい。現在オックスフォード大学Bodleian Libraryに所蔵されているフォーマンの自筆手稿であるMs. Ashmole 1494と1491は共に、"Of Appoticarie Druges"という題がつけられ、錬金術用語がアルファベット順に並べられて解説されているという。1) Ms.Ashmole 1472と合わせ、現存するフォーマンの錬金術手稿には、George Ripley(1415-1490)、Raymond Lull(b. ca. 1232-36.-d.1315)、Thomas Norton(?1433-1513か1514)等の手になる錬金術著作や、筆者別稿で考察したJohn Dee(1527 -1608)の霊媒をつとめたEdward Kelly等の引用がされているということである。2)

決して裕福な境遇ではなかったフォーマンは、１５７３年から翌年にかけ、オックスフォード大学の貧しい給付生として在籍した後、3)紆余曲折を経て、１５９１年にはロンドンで医師として開業した。折しもペスト大流行の折、ほかの大勢の医師達が、医療活動を放棄したなか、ロンドンに留まって治療を行ったため、その評判は高まり、多少の経済的余裕を持つことができたらしい。4)１６１０年に初演されたBen Jonson(1572-1637)の喜劇*The Alchemist*に登場する錬金術師のサトルのように、何らかの経済的基盤がなければ錬金術実験などは行えないからである。フォーマンの日誌や診療記録によると、

愛知工業大学　基礎教育センター　(豊田市)

彼は１５９５年の四旬節には、上で挙げた錬金術著作に出てくる実験器具や炉の準備をして、賢者の石を生成する実験を始めたとされる 5) 同時に、元来医師であるフォーマンは当然のことながら、薬草の蒸溜も行ってシロップや「なめ薬」を製造していたという。6) 占星術師でもあるフォーマンらしいのは、例えば１５９９年３月２７日、８月８日と自ら占星術を行い、錬金術実験が成功して、賢者の石を手に入れることができるかどうかを占っている記録なども残っていることである。7)

フォーマンの手稿には失敗に帰した錬金術実験の記録も残されている。１５９６年３月、金や水銀の精製中、容器やガラスを破損してしまったり、8)またある時には、rose water とクラレット酒で牛の足を長時間煮詰め、粗布で濾した後、シナモン、しょうが、砂糖を加えるなど、9) 有機物を材料に使った錬金術実験も行っていたようである。本稿で後述することになる"Geber's cook"に文字通りぴったりの錬金術実験だが、Ms. Ashmole 1491 の 1269-1270 には、錬金術実験用の各種容器のスケッチが残されており、10)ジョンソンの『錬金術師』で言及される、フラスコ "bolts-heads" (II.ii.9)、連結瓶 "aludels"(II.iii.35)、卵形容器 "Gripes egge"(II.iii.40)、ペリカン首付蒸溜器 "Pellicane"(II.iii.78)等々、多種多様な容器の名称を彷彿とさせ、ジョンソンの風刺が当時、単なるナンセンスではなかったことが実感できる。

このようにジョンソンが『錬金術師』を執筆した当時はまだ、フォーマンのように錬金術に手を染める者が少なからず存在したし、この点でフォーマンは決して例外的であった訳ではない。英国科学革命の担い手ともいうべき、化学者の Robert Boyle (1627-1691)、数学者、物理学者の Sir Isaac Newton (1642-1727)でさえも錬金術の研究・実験を行っていたことが、既に研究者によって立証されている。11)次セクションでは戯曲『錬金術師』と同時代の人々が、錬金術をこのように評価していたのかを若干見ることにしたい。

2. 同時代の錬金術

ランベスで密かに行っていたフォーマンの錬金術実験を、ジョンソンは直接知る由もないのだが、『錬金術師』における錬金術言説は、全くの誇張ではなく、ジョンソンが風刺する錬金術テキストも現実に存在していたことがよく知られている。12) Herford and Simpsons は、劇中引用された文献として、木炭の穴に銀のくずを入れる(I.i.93-94)チョーサー『カンタベリ物語』の「僧の従者の話」(c. 1395)、13)エラスムスの *The Colloquies*、また、第２幕第３場 131-207 行で延々と続くサトルとサーリーの論争は、Martin Delrio の *Disquisitiones Magicae* が殆どそのままの形で引用されていると言う。他に Herford and Simpsons が挙げているのは、Arnold of Villanova (1240?-1311?) の *Rosarium Philosophorum* (II.i.39,40,65-67, iii. 106-114)、Pseudo-Geber の *Summa Perfectionis* (13 世紀末?)(II.v.25-26)、パラケルスス (1493-1541)の *Mannuale de Lapide Philosophico* (II.ii.25-28, v.28)、Robertus Vallensis の *De Veritate et Antiquitate Artis Chemicae* (II.i.101-104)等であり、14)ジョンソンの広範な資料収集には驚くべきものがある。

既にエリザベス朝の知識階級は、俗語による錬金術著作であるリプリーの *The Compound of Alchemy* (1591 年出版)、*The Mirror of Alchemy* (1597)の他、Roger Bacon が寿命延長について書いた 15) *De retardatione accidentium senectutis*、の英訳(1590 年)をはじめ、ルルのテキストも１５９０年、John Williams の英訳でオックスフォードから出版されて入手可能であったという。16)また、リプリーの *Compound* と並んで権威のあった俗語の錬金術書である、ノートン、*The Ordinal of Alchemy* についても１５７７年頃までには写本の形で知識人の間に知られていたとのことである。17)リプリーの *Compound* とノートンの *Ordinal* については、上述フォーマンや、エリザベス朝の著明な数学者、魔術師で『錬金術師』にその名が直接言及されているディーも自らこれらを筆写しているというのである。18)

Juneja も指摘するように、『錬金術師』の観客の中には、目の前の舞台上、「いかさま」としてジョンソンが描き出す錬金術の可能性について、フォーマンのように実際に錬金術研究・実験を行っている者、錬金術を実践している訳では無いけれども錬金術を信奉している者、錬金の可能性をどこかで信じている者も沢山存在した筈である。19)

Feingold は、エリザベス朝およびスチュアート朝時代のオックスフォード、ケンブリッジ両大学において、従来考えられていたように、ルネサンス新プラトン主義的

オカルト伝統は表立った弾圧を受けた訳ではなく、大学人の中には、独自にオカルト研究、実験を行った者も少なくなかったことを指摘する。20) 勿論、大学の正規課程にオカルト哲学の講義があったことはないのだが、Sir Philip Sidney がディーに化学の手ほどきを受けていた例にも見られるように、個人的に Tutor から「化学」実験の指導を受けた者も存在した。君主のホロスコープを作成したり、貨幣偽造や妖術の嫌疑がない限り、大学当局もこうした個人のオカルト研究を黙認していた節がある。21)大学公開討論のトピックや、公開討論の準備のための学生ノートなどには、オカルトへの関心が散見されるという。22)

錬金術に関心があったとされる大学出身者には、上述のディー、Thomas Smith、Gabriel Harvey、William Butler、Samuel Norton (*Ordinal* を執筆した Thomas Norton の曾孫)、John Rodeknight、John Case、オックスフォード大学グロースター学寮の魔術師と呼ばれた Thomas Allen、ディーの友人 Edward Cradock、John Bulkeley 等々がリストされている。23)このうち John Case はルネサンス・アリストテレス主義者であり、Cradocke は、その錬金術著作を後に Elias Ashmole が *Theatrum Chemicum Britannicum*(1652)の中に再収録している錬金術の権威である。24)経歴のはっきりしないケリーも、"Edward Talbot"という名前で、オックスフォードに在学していたらしく、一時は Thomas Allen の秘書として働いていたらしい。25)

錬金術に関心があった大学人に更に占星術に関心があったものを加えると、Robert Fludd、Roger Ascham、医学者の John Caius、天文学者の Henry Briggs、尚古家の William Camden と、当時の知識人の名前がずらりと並ぶ。26) Camden はディーとも親交があり、何よりウエストミンスター校時代のジョンソンの師であったのも興味深い。27) 当時はまだ、知識人階級にあっても形成途上にあった新科学が、オカルト研究と渾然一体となっていた様子が、極めて明確に示されると言えよう。ちなみに当時、蔵書家として有名だった Thomas Allen の蔵書には、ロジャー・ベーコン、ルル、ヘルメス主義者の著作が、28)ディーの蔵書リストには、パラケルスス全集、錬金術関係では、チョーサー「僧の従者の話」にも出てくる 29) Arnold of Villanova の全集、ロジャー・ベーコンの *Opus tertium*、Pseudo-Geber、Petrus Bonus の著作等が存在していたと言う。30)

大学人ばかりが錬金術に関心を寄せていた訳ではない。Mebane によると The Family of Love や、再洗礼派等の急進的ピューリタン宗派は、ヘルメス主義と錬金術に関心を寄せていたことを指摘する。オカルト哲学に特有の「内的照明」や「霊的完成」がこうした急進的ピューリタンの神学と一脈通じるものがあったからなのであるが、31)こうした急進派ピューリタンの中には、錬金術だけでなく、パラケルスス医学を信奉するものも多かったという。32) この点も『錬金術師』に登場する二人の再洗礼派、アナナイアスと、トリビュレーションの性格付けと一致している。

さて、『錬金術師』と同じく魔術を扱った *The Tragic History of Dr. Faustus* (1604) の著者でもある Christopher Marlowe (1564-1593)がケンブリッジ大学在籍中に、大きな影響力を持っていた神学者が William Perkins だが、彼は、富と権力、知識への渇望のために人々は魔術に陥るとしている。33)ジョンソンの『錬金術師』でも、富を渇望するマモン、国際的影響力拡大を目指す再洗礼派のアナナイアスとトリビュレーションは、いずれもその野心のために錬金術に関心を寄せている点で、パーキンズの分析と一致している。パーキンズは更に、魔術師になりやすいタイプの人間として、a) カトリック、b) 学識ある魔術師、c) 学のない emipirics を挙げているが、34)上記した、Thomas Allen は悪名高いカトリックであり、a)とb)の性格付けを両方とも満たすが、Allen のいたグロースター学寮は当時、オックスフォード大学のカトリック牙城でもあったのである。35)

ここで大変興味深いのは、ジョンソンがフェースの口を借りて「ヘンリー八世が治世３３年に発布された魔術禁止令」36)に違反していると、意図的に史実を曲げた台詞を言わせている点である。英国で錬金術が禁止されたのは、１４０３－１４０４年、ヘンリー５世の治世第４年のことであり、37)ヘンリー８世の治世３３年すなわち１５４１年に発布された法令の中には魔術に関するものは存在しない。１５４１年に発布された法令のうち、極めて重要なのは、教皇主義者の蜂起である１５３７年の Northern Rebellion をうけて制定された反逆罪に関する法令である。38)ジョンソンは第１幕第１場の冒頭のこの部分で、意図的に錬金術と反逆罪をすり替えており、国際的な勢力拡大をもくろむ亡命ピューリタンや教皇主義者勢力を、反逆罪という共通項でくくり、錬金術と結びづける。意図的な史実の差し換えによって、ジョンソン

がこの芝居で風刺しようとした錬金術師、急進派ピューリタン、そして彼等に口汚く批判されるカトリック教皇主義者が、丁度パーキンズが魔術に陥りやすいとした人物類型と平行する形となり、ジョンソンが彼一流のレトリックの力業を使って、「いかさま師」としてひとくくりにしているのを見ることができるのである。

次セクションでは特に、フォーマンとディーも筆写しており、エリザベス朝時代にかなりの普及をみていたリプリー、*The Compound of Alchemy* とノートン、*The Ordinal of Alchemy* の2著作に照らして、上述したパーキンズのc)の人物類型について、彼等が伝統的に"Geber's cook"と呼ばれること、ジョンソンが『錬金術師』で描写した錬金術が、中世以来の錬金術伝承の中でどのような評価をされるものなのかを探り、ジョンソンの風刺の戦略について考察したい。

3. サトルと Geber's Cook

まず『錬金術師』において、サトルをはじめとする錬金術師がどのように描かれているのかを追っていくことにしよう。第1幕第1場、この芝居を動かすサトル、フェース、ドルの三人が、いかさま稼業を始めるまでのお互いの境遇について、サトルとフェースが応酬する。フェースは、乞食同然で街を徘徊していたサトルの世話をしてやったのは俺なのだぞと恩に着せる。

フェース

だがいやでも思いださせてやる。パイ・コーナーだ、屋台の湯気の匂いをかいで腹を満たそうってとこだ、そこを飢え死にかけた貧乏神みたいな男が歩いてた、見るもあわれなほどのろのろと、やせこけた鼻を突き出して、肌の色と言やあ妙に黄ばみ、そこに憂鬱なニキビがぶつぶつ噴き出して、まるで射撃場で火薬の煤をかぶったって面だった。39)

サトルの不健康な肉体的特徴を述べた後、フェースは続けて自分に会う前のサトルの外見について以下のように描写する。

フェース

まだ暗いうちにごみ捨て場をかきまわして、かっさらってきボロ切れ何枚かをピンで止めたのを身にまとい、霜やけの足にはかび臭いスリッパ、よれよれのフェルト帽に、すり切れたコート、それもオンボロで肉のない尻が丸見えだ 40)

みすぼらしいぼろぼろのマントを着て、一文無しで場末の街をうろうろし、硫黄の臭いをぷんぷんさせた顔色の悪い男というトポスは、チョーサー「僧の従者の話」に出てくる従者の人相書そのままである。Abraham はルネサンス期になって、中世錬金術の権威であった8世紀の学者 Jābir ibn Ḥayyān に対する反動として、小便、卵、髪の毛や血などを使い、失敗ばかりしている錬金術師を Jābir のラテン名をとって Geber's cook と蔑称したと記している。41)(但しこの Geber は *Summa Perfectionis* の著者である Pseudo-Geber とは別人であるとされる。)42) リプリーは、自然哲学者の下位におかれた、無知で無学な Geber's cook を以下のように説明する。先程紹介したように、フォーマンが牛の足を rose water とクラレット酒で煮込んでいた錬金術レシピの様に、動植物の有機材料を使った錬金術をリプリーが "rosted"や "broyled"と料理に関する動詞を使って表現しているのも、Geber's cook の名の通り、当を得たものとなっている。

Thus I rosted and broyled, as one of Gebers cookes,
Oft times, in the asshes my winning I sought,
For I was deceived by manie folse bookes,
Whereby untruth truly I wrought,
But all such experiments availed me right nought,
But brought me in danger and encumbrance,
By losse of my goods and other greevance. 43)

このように、まがい物の錬金術著作にだまされて失敗を繰り返し、財産を失う錬金術師、すなわち Geber's cook は、ノートンでもまた、『錬金術師』で描かれるのと同じ様な人相書きで提示される。自らの空想に惑わされ、容器やガラスを毎日のように割り、有害物質の中毒で視力を損ない、昼夜違わずの作業で煙と悪臭にまみれて目は霞み、頬はこけ、服はぼろぼろ、お財布はすっからかんで一文無しという訳である。チョーサーにも、「錬金術にとりつかれている奴はどこにいようが臭いのでわかる。

あの硫黄のにおいがするのだ」44)と言っているが、以下のノートンの引用にも同様の表現が見られる。

But many men be moov'd to worke after their fantasie,
……
... but in fire they flye away,
Such breake pottes and glasses day by day,
Enpoysoning themselves and loosing their sights,
With odours, smoakes, and watching up by nights.
Their clothes be baudy and worne thread bare,
Men may them smell for multipliers where they goe,
To file their fingers with corosives they doo not spare,
Their eyes be bleard, their cheekes leane and blowe,
And thus for had I wist they suffer losse and woe:
And such when they have lost that was in their purse,
Then doo they chide, and Philosophers sore do curse. 45)

上記引用は共に『錬金術師』のサトルの運命を暗示していて面白いが、リプリーの *Compound* と並んで当時権威のあった俗語による錬金術指南書、上述ノートン *Ordinal* では、アラビア人がElixirと呼ぶ、賢者の石をつくり出す錬金術過程を２つに分類しており、彼は当該著作の序文で著作の構成を説明しながらこの二つ、すなわち"grose werke"と"subtile werke"の相違を説明する。

The iiij chapiter techeth the grose werke,
A fowle laboure not kyndly for a clerke,
In which is fownde ful grete trauayle,
with many perilis and many a fayle.
The v chapiter is of the subtile werke
which god ordeynyde only for a clerke,
But ful few clerkis can it comprehende,
Therfore to few men is this science sende. 46)

"grose werke"は学識ある錬金術師には相応しくない、きつい、きたない、危険で失敗がつきものの作業であり、この部分を担当するのが、これまで述べてきたGeber's cookだ。これに対し、神が学識のある錬金術師に恩寵として託すのが、"subtile werke"と呼ばれる作業で、これを正しく理解できるのはごく僅かであるというのである。興味深いことに、錬金術過程を "grose werke" と "subtile werke"に二分するのは、ノートンに特有のことであるという。47)『錬金術師』中、フェースに会うまでは、Geber's cookの人相書きにぴったりだった「サトル」が、その名の通り、本来は学識がある錬金術師が通常行うべき"subtile werke"を執行するという役割の倒錯が見られるが、このことからもジョンソンは、劇中直接名前をあげることはしないけれども、『錬金術師』執筆のために、ノートンの *Ordinal* を使用したことは明らかだと言って差し支えないだろう。

また、劇中の人物構成をみると、三人のトリックスター、すなわち"subtile werke"を行うGeber's cookの「サトル」とともに、「主人」の留守中に屋敷の主を僭称する「召使い」頭のフェース、「妖精の女王」や「男爵の娘」になりすまし、「ピューリタン」神学者、ブロートンの著作をまくしたてる「売春婦」ドルと相まって、「さかさま世界」の三位一体は完全なものになっている。

さて、ノートンは更に、"subtile werke"がどんなものであるかをを具体的に説明する。錬金術の "subtile werke" において、丁度、尿の色で熱、冷、湿、乾の四元素の混合割合を知り、体液が均衡を保っているかどうかを知ることができるように、48)錬金術においても、想定できるあらゆる材料の組み合わせに応じて、生成物の色が変化し、生成物中の四元素の比率をその発色によって知ることができると言うのである。以下の引用でノートンは、錬金術の"subtile werke"では、尿の色に見られる色の変化以上に多くの色が観察されると主張する。

In owre subtile werke of Alchymye
Shal be alle colours that hath be seyn with Eye,
An hundreth colours mo in certeyne
Than evir was in vreyne seyne;
wherin so many colours myght not be,
But if oure stone conteynede euery gree
Of al composicions fownde in werke of kynde.
And of al composicions ymaginable bi mynde.
Of as many colours as shal therin be seyne,

As many graduacions your wisdom most atteyne. 49)

上記引用部分に続いてノートンは、色の判定については、"Raymonde"の著作も研究すべきだと言っており、50)ノートンがレーモン・ルルに続く錬金術伝統を継承しているのがわかる。劇中、錬金術師サトルも、舞台奥にあると設定されており、観客からは見ることができない実験室で作業している（ことになっている）助手フェースに、生成物の色の変化を逐次報告させ、色の具合から足りない元素を推察し、これを補うための材料を指定している。『錬金術師』第２幕第２場では、サトルの助手として働くフェースが、錬金術師にお定まりのトポスである、かすんだ目"bleared-eyes"で、"subtile werke"をしつつ、生成物の色の変化を描写している部分が存在する。

フェース

一生懸命火を吹いたのは、旦那様のためですよ、ブナがないときは木炭をうんとほうりこみ、しかも火力を平均に行き渡るようにしなけりゃならない。この目も色の変化を読み取るために開けっ放しでかすみました(bleared-eyes)、薄いレモン色からライオンの緑色、カラスの色、孔雀の尾の色、白鳥の羽根の色と。51)

賢者の石が完成した暁に出現する純白の前に、様々な色が観察されることは、以下のリプリーの引用でも明らかで、リプリー以外の錬金術著作にも共通するものである。また各々の色を象徴する動物シンボルも、錬金術伝統に普遍的に見られるオーソドックスなものがフェースの台詞にリストされている。色の変化については、リプリーの一部を引用しよう。ここでは「孔雀の尾の色」、「ライオンの緑色」、「カラスの色」、の他に、第２幕第３場で言及される「豹の色」52)も加わっている。

Pale & black with false citrine, imperfect white & red,
The Peacocks feathers in colours gay, the Rainebowe which shall overgoe,
The spotted panther, the lyon green, the crowes bill blue as lead,
These shall appeare before thee perfect white, and manie other moe, 53)

さて、このように錬金術生成過程における四元素の配合を測定する手段は、実は、*Summa Perfectionis* を執筆した Pseudo-Geber に遡るもので、彼は、生成物中の熱、冷、湿、乾の四つの性質がどの位の量であるかを測定する方法を考案し、また完全な均衡を得るためには、どの物質をどの位加えればいいかを算定する方法を創案したとされている。54)このように『錬金術師』の錬金術は、Pseudo-Geber に続く伝統を継承したノートンの"subtile werke"を、反映しており、この方法論は劇中、来訪してきたアナナイアスにサトルが尋ねた質問の前提を形成する。以下の引用では、錬金術伝統のうち、どの流れを汲むのか、錬金術の手法のうち、どれをマスターしているのか、アナナイアスの adeptness を質問しているのである。

サトル

錬金術のどの派を信仰しておる？レーモン・ルル派か、リプリー派か、錬金の子か？昇華法、塩分除去法はやれるか？　焼法は？舌でやや強い酸味(sapor pontick)とやや弱い酸味(sapor stiptick)の区別がつくか？ 55)

リプリーで味による"subtile werke"は説明がされていないのと対照的に、ノートンではこれが詳述されており、上記引用に現れる「やや強い酸味」と「やや弱い酸味」が説明されていることからも、ジョンソンはノートンをよく知っていたことが以下の引用でも証明される。

How that of saours there be fulli nyne;
which ye may lerne within half an houre
As sharpe taste, vnctuous, and sowre
which iij do subtile mater sygnifye;
And other iij do Meen mater testifye,
As byting taste, saltish, & werish alle-so;
Othir iij came thikke substance fro,
As bitter taste, vndersowre, and dowce,
These ix be fownde in many a noble howse.
v. of these ix. be engendrid with hete,
vnctous, sharepe, salt, bitter, and dowsett;
But of the ix, the remenant alle fowre
Be made with cold, as is the sapour sowre,

And so is sowrishe taste, callid *sapour pontike*,
And leest sowre also, callid *sapour stiptike*; 56)

ノートンの錬金術では、"subtile werke"は色だけでなく、味、臭いなどの感覚尺度も利用され、熱、冷、乾、湿の四元素の混合比率を、色、味、臭いの３点から精密に測定する方法がリストアップされている。57) こうして、舞台上繰り広げられるサトルの"subtile werke" は、第１幕第１場で既にGeber's cookたるサトルの正体が暴露されてしまっているために、サーリーばかりでなく観客にとっても、うさん臭さを禁じ得ないのだが、次セクションでは、サトルの「いかさま」が、中世以来の錬金術伝承からもそれとなく解るような戦略がとられていることを詳述することにしよう。

4. 大便、小便、血と毛に卵

一方、中世錬金術の権威、ルルの *Testimentum* においては、それより古い錬金術伝承、例えばロジャー．ベーコン等において行われた血液、髪の毛のような動植物性有機材料を錬金術に使用することに反対し、錬金術過程("opus")で、自然物のうち完全性と非腐敗性を持つ物質、即ち上記四元素が完全な均衡を保っている金と銀を使用するべきだとした。なぜならこれらの物質にふくまれている、完全性の種子は、その完全性を他の自然物に付与して、その物質を完成するからである。 58) ルルに影響を受けたとされるノートンとリプリーは、錬金術に金属以外の物質を使用するのは邪道だとしている点で共通している。59)まず、リプリーから引用してみよう。

For all the while they have philosophers bene,
Yet could they never know what was our Stone,
Some sought it in *dung*, in *urine*, some in wine,
Some in starre slyme (for thing it is but one),
In *blood*, in *egges*: some till their thrift was gone,
Dividing Elements, and breaking manie a pot,
Sheards multiplying, but yet they hit it not. 60)

"starre slyme"は、雨上がりに地上に残るゼリー状のものをいい、当時は一般に流れ星か隕石の残留物であるとされていたものらしい。61)リプリーは、無知な錬金術師が、賢者の石の何たるかを知らないために、排泄物、ワイン、血液や卵などにこれを求めるが、当然のことながら失敗してしまうと苦言を呈す。言うまでもなく、『錬金術師』中、錬金術で使用される材料名を、錬金術用語がもつ比喩的イメージの多様性ともに列挙しているのは、錬金術に懐疑的な第２幕第２場のサーリーである。延々と続く材料リストに、リプレーが上記引用で批判した有機材料が取り混ぜられているのに注目したい。

サーリー

だいたいあの術語は何です、錬金術師によってそれぞれ違っているじゃないですか？たとえば霊薬(elixir)、聖母マリアの乳の水銀液(lac virginis)、賢者の石(stone)、万能薬(med'cine)、黄金の種子(chrysosperme)、塩(sal)、硫黄、水銀、高地の油(oyle of height)、いのちの樹、血液、白鉄鉱(*marchesite*)、不純亜鉛華(*tutie*)、マグネシア(magnesia)、ガマ(toade)の色、カラスの色、豹の色、竜の水銀、太陽の金、月の銀、天空の瑠璃(firmament)、鉛(adrop)、真鍮(lato)、水銀(azoch)、雄黄(*zenich*)、硫黄(chibrit)、水銀(heautarit)、それから赤色男性(red man)の硫黄、白色女性(white woman)の水銀、スープ状溶液(broth)、溶媒(menstrues)、物質、小便(*pisse*)、卵の殻(egg-shell)、女の月経、男の血、髪の毛、焦げたボロ布、白墨、大便(*merds*)、粘土、骨の粉、鉄屑(scalings of iron)、ガラス、ほかにもまだまだ奇妙な材料の山だ、いちいちその名をあげたら人間破裂しちまうぜ。62)

Herford and Simpsonsも指摘するように、上記引用では、*Summa Perfectionis* xii.からの引用も混ぜられているという。63) Pseudo-Geberもまた、それより古い錬金術伝承のJābirとは異なり、血液、尿、植物性のエキス等、動植物材料を錬金術で使うことに反対を唱え、Jābirの伝統から大きな一歩を踏み出したとされている。64)

次は、やはり有機材料に批判的なノートンから、同主旨の引用を挙げてみよう。以下では、植物性材料についてキンポウゲ、クサノオウ、クマツヅラ、銀扇草、等々、もう少し細かいリストが上がっている。こうした植物性原料は医師フォーマンであれば、普段からなじみの深いものもあったかもしれない。ノートンは自らの若い時代

を振り返って、失敗に帰した錬金術材料をひとつひとつ挙げているが、ノートンのリストにもやはり、髪の毛、卵、排泄物が含まれている他、ワイン、蜂蜜なども見ることができる。aqua vitae 等、蒸溜によるワインのアルコール精製と錬金術は古くから密接な関係にあり、65)蜂蜜も古来から、その甘さと黄金色によって、"elixir"の別名である他、錬金術用溶剤である水銀を指すこともあったと言う。 66)錬金術用語を字義的に解釈するか、比喩的に解釈するかという曖昧性は、こうしたリストの解釈に必ずと言ってもいいほど付きまとうものなのである。

For he had spendide al his lusty dayes
In fals receptis & in such lewde assayes
Of herbis, gummys, of rotis, and of grasse,
Many kyndes bi hym assaid was,
As crowfote, salandyne, & mezereon,
Berbayn, *lunarye*, and mortagon,
In *heere*, in *eggis*, in *mderdis*, & *vryne*,
In Antymonye, arsenek, in hony, wax, & wyne,
In calce vive, sondyfere, and vitrialle,
In *marchasites*, *Toties*, & euery mynerall,
In malgams, in blaunchers, in citrinacions,
Alle fille to nogthe in his operacions. 67)

上記リスト中の、銀扇草は、以下のサーリーの台詞に再登場する。やはりサーリーは、錬金術のレシピに猜疑心が拭えず、こうしたものはトランプゲーム以下のいかさまだと交ぜかえす。

サーリー
まったく！ふだんはごりっぱなあんたが、お金持ちでなんの不自由もない、しかも賢いあんたが、このように誓言や理屈を並べ立て、わざわざだまされるとはねえ！それになんです、これが霊薬(elixir)で、母岩鉱石(lapis mineralis)で、銀扇草(lunarie)ですって、それならトランプゲームのいかさまのほうがよっぽどまともだ。68)

サーリーはともかく、前セクションで見たような写本、出版物等を利用することができた当時の知識人で、錬金術研究に多少なりとも手を染めたことがある者であれば、ジョンソンが下敷きにしている錬金術伝承をそれと知ることができたはずである。ジョンソンの風刺の本領は、錬金術のロジックをそれと解る形で使った上で、これを錬金術以外のオカルト魔術、急進的ピューリタン主義、教皇主義と、同列に並べて、まとめて「いかさま」として粉砕する点にある。69)

さてここまで来ると、サーリーが、どうしてもうさん臭いと嗅ぎ付けたマモンの錬金術理論は、Jabir 等、有機物を錬金術材料にする中世錬金術の古い伝統と、これを否定する Pseudo-Geber、レーモン・ルル、ノートン、リプリー等の金属材料を使用する錬金術伝統が、相互に矛盾したまま混然一体となった、かなりいかがわしいものであることがはっきりしてくる。

第２幕第３場で、錬金術に懐疑的なサーリーと、錬金魔術の夢で舞い上がっているマモンの間で行われるやりとりに、深遠なる錬金術哲学者「サトル」は、術語の混乱について、「錬金術師がその術を秘密にするため」70)のものであるとコメントし、錬金術レシピに関して、真偽判定を宙に浮いたままにする韜晦戦術を使っている。

このように真理値決定を中断されたまま積み上げられる錬金術は、芝居の最初から最後まで、場所の設定を変えることなく、殆ど完璧な「場の一致」をみせる『錬金術師』において、71)サトルの実験室は舞台の奥にあると推測され、観客の前では、実験室にあるとされる多種多様なガラス容器、錬金用実験炉が一度たりとも目に見える形で提示されることがないまま、錬金術の実験過程を報告するフェースと、これに応じて指示を与えるサトルの会話だけで錬金術言説が構築されていく。

従って、『錬金術師』の錬金術は、サトルとフェース、マモンと再洗礼派の二人、そして観客の想像力にのみ存在し、実体を持たないものであり、登場人物の肥大した欲望が豊饒なイメージをつくり出し、古代ローマの爛熟肥大した欲望表象と連動する。サーリーが長々とリストした矛盾だらけの錬金術レシピは、第２幕第２場で、錬金術成功の暁に手にするとマモンが皮算用する綺羅びやかな大饗宴のイメージと併置される。駱駝の踵をふるまったとされるローマのアピキウスも顔色を失うような、72)「鯉の舌」、「ヤマネの肉」、「生きたまま刺身にされたサーモン」、「鯉の髭」、「油漬けのキノコ」、「はらみ豚から切り取ったばかりの乳首」等々、73) 独創的ではあるが趣味も価格も法外で、残酷な料理法が言葉の錬金術師ジョンソンの手で列挙されており、ジョンソンの錬金術レシピの多様性と呼応する。73)

唖然とするのは、ジョンソンの想像力が生み出した食卓ばかりではない。エレファンティスやアレティーノのポルノグラフィーになぞらえて、マモンが思い描く放埒な閨房のイメージも、ジョンソン一流の五官に訴える豊饒なイメージが散りばめられており、これにもまた錬金術イメージが巧みに織り込まれていることを以下で見てみよう。

錬金術用語で使われた「卵」は、賢者の石を生成する錬金術用容器を指し、74)『錬金術師』第２幕第３場で使用されている「卵形容器」"Gripe's egg" 75)の別称である。マモンの閨房は、その卵形の形状から、錬金術で、「赤色男性」たる硫黄が、「白色女性」76)たる水銀と卵形の錬金フラスコで結合する「化学の結婚」を連想させ、この結婚で生まれた"philosopher's child"は、mercurial water の heated bath におかれて、これを吸収し養われるという。77)この過程は、リプリーでは錬金術第７段階とされ、"cibation"（『錬金術師』第２幕第５場２４行では"cohabation"がこれに当たる)78)と呼ばれるが、"philosopher's child"は、しばしば「鳥」に喩えられ、mercurial water は「羽根」のイメージで描かれる。マモンがベッドに「羽根は固すぎる」79)ので使わないと言っているのは、明らかにこの錬金術イメージのパロディーである。

またジョンソンは、錬金術の最終段階である"projection"に到るまでのプロセスについて、不純物を含む生成物中から、"volatile spirit"を抽出するリプリー第８段階の「昇華」を、蒸溜フラスコに喩えられたマモンの寝室に、霧のようにたちこめる香水として描く。80)更に、卑金属を錬金する「赤い石」を生成する第１１段階"multiplication"で、この「赤い石」を、ばらの花びら、または「ルビー」81)に喩えている。このようにローマの古典を織りまぜたマモンの酒池肉林は、錬金術イメージと密接に結びつけられており、エキゾチックなイメージの展開が見事だ。

では、リプリーが正しい錬金の方法としているのは、一体何か。多種多様な材料、容器、炉を使うのでもなく、一つの材料、ガラス容器、炉で良いのだと言う。リプリーの該当部分を引用してみよう。

> One thing, one glasse, one furnace, and no moe,
> Behold this principle if he doe take,
> And if he doe not, then let him goe,
> For he shall never thee rich man make;
> Timely it is better thou him forsake,
> Than after with losse and variance,
> And other manner of displeasance.82)

劇中、丁度フォーマンの自筆手稿にあるスケッチの様に、フラスコ "bolts-heads"(II.ii.9)、連結瓶 "aludels"(II.iii.35)、卵形容器 "Gripes egge"(II.iii.40)、ペリカン首付蒸溜器 "Pellicane"(II.iii.78)、受容器 "recipient"(II.v.1)、等々、多種多様な容器の名称や、温浴加熱器 "balneo"(II. iii. 41)または"S. Marie's bath"(I.iii.61)、燃料自給式消化炉 "athanor"(II.iii.45)、化学分析器 "Kemia"(II.iii.99)、連結炉 "piger Henricus" (II.v.80)または "Furnus acedioe"(III.ii.3)、循環塔型炉 "Turris circulatorius"(III.ii.3)と、術語のバロックとも言うべき程のイメージの洪水に加えて、サーリーが並べ上げるごたまぜの錬金術レシピは、リプレーの sober な警告と際立った対照をなす。

さてこのようにリプリー著作で警告された誤った錬金術のディテールが、ジョンソンの豊饒なイメージの中で周到に準備された後、予測された破局を迎えることになる。

5. 終末

劇中第４幕第５場で、とうとう発作を起こしたドルが、ブロートンのヘブライ的黙示論をまくしたて、「ローマ」、83)すなわち、急進的ピューリタンからすれば「反キリスト」の到来で、「終末」がやってくる。この直後、サトルたちの錬金術も失敗に帰すことになるが、ペスト流行中は、その用心深い性質からロンドンを離れ、グローブ座の観客よりも遅く戻ってきた屋敷の主人、ラヴウィットが、84)キリストさながらに「再臨」すると、"subtile werke"を行う Geber's cook のサトル、主人の留守中に屋敷の主を僭称する召使い頭のフェース、妖精の女王や男爵の娘になりすました売春婦ドルが構成する「さかさま世界」も、その終わりを告げる。

これまでに述べてきたように、ジョンソンは当時入手できた錬金術文献を駆使して、サトルとフェースの実体を持たない錬金術言説を構築する。Pseudo-Geber、ルル、

ノートン、リプリー等、ジェームス朝初期に、俗語の形でも読むことができた錬金術著作に基づき演出されたパロディーは、中世以来の錬金術権威に加えて、これらを読んで錬金術を信奉していたかもしれない観客をも、舞台上のいかさま錬金術師と共に風刺する。

錬金術師への風刺は、『錬金術師』冒頭で、反逆罪関連法の制定年と取り違えられた「ヘンリー八世が治世三十三年に発布された魔術禁止令」85)によって、国際的勢力拡大をもくろむアナナイアス、トリビュレーション等の急進派ピューリタン、彼等が口汚く批判する教皇主義者が、錬金術師や魔術師と、ひとくくりにされている。このジョンソン一流のレトリックの力業は、決して根拠の無かったものではなく、当時パーキンズが、魔術に陥り易いとして分類した、人物類型にも反映しているものであることを見て取ることができると言えよう。

註

1) Traister, 110-111.
2) Traister, 111.
3) Traister, 6.
4) Traister, 47.
5) Kassell, "The Food of Angels," 347.
6) Kassell, "The Food of Angels," 347.
7) Traister, 111.
8) Kassell "The Food of Angels," 347.
9) Traister, 114.
10) Traister, 112-113.
11) Principe, *Adept*. ドブス『ニュートンの錬金術』参照のこと。
12) Duncan "Jonson's Alchemist," 699.
13) "The Canon's Yeoman's Tale," 1158-1164.
14) Herford and Simpsons, "Play Commentary," 46-47 と Duncan の２論文を参照のこと。
15) ディーバス、32-33, 603.
16) Webster, 308-309.
17) Reidy, "Introduction," xli.
18) Webster, 310.
19) Juneja, 6.
20) Feingold, 75.
21) Feingold, 77.
22) Feingold, 78.
23) Feingold, 80-87.
24) Ashmole, 291-304.
25) Harkeness, 20.
26) Feingold, 80-87.
27) Mulryan, 164.
28) Feingold, 85.
29) "Cannon Yoeman's Tale," ll. 1428-1429. 西脇、276.
30) Clulee, 250, 264, 267.
31) Mebane, 141.
32) Mebane, 96.
33) Mebane, 105.
34) Mebane, 106.
35) Tyacke, 64. Allen については、Tyacke, 386-387, 634 等も参照。
36) *The Alchemist*, I. i. 111-114. 小田島、236.
37) Geoghegan, 10. Herford and Simpsons, "Play Commentary,' 58-59.
38) 33 Henry VIII, c. 23. Elton, 80-83.
39) *The Alchemist*, I. i. 25-31 小田島、231.
40) *The Alchemist*, I. i. 33-37. 小田島、231.
41) Abraham, 84.
42) Newman, 94.
43) Ripley, 87.
44) "Canon Yoeman's Tale," ll. 884-889. 西脇、257.
45) Ripley, 50.
46) Norton, 151-158.
47) Reidy, "Introduction," lxx.
48) Norton, 1491-1494.
49) Norton, 1547-1556.
50) Norton, 1557-1558.
51) *The Alchemist*, II. ii. 21-27. 小田島、273. Herford and Simpsons, "Play Commentary," 83.
52) *The Alchemist*, II. iii. 189. 小田島、291.
53) Ripley, 83.
54) Reidy, "Introduction," lx.
55) *The Alchemist*, II. v. 7-10. 小田島、304.
56) Norton, ll. 2108-2122. 引用中イタリックは本考の筆者による。
57) Norton, Chapter 5.
58) Pereira, 32.
59) Reidy, "Introduction," lxiii.
60) Ripley, 51. 引用中イタリックは本論筆者による。

61) Linden, 121.

62) *The Alchemist*, II. iii. 182-198. 小田島、290-291. 引用中イタリックは本論筆者による。

63) Herford and Simpsons, "Play Commentary," 82.

64) Newman, 96.

65) Pereira, 37. Crisciani and Pereira, 7, 18-20, 22.

66) Abraham, 103.

67) Norton, 1051-1062. 引用中イタリックは本論筆者による。"vitriol"の言及は、*The Alchemist*, I. iii. 76. また、同箇所にある、"sal-tartre"は、Ripley, 86 にある。

68) *The Alchemist*, II. iii. 278-285. 小田島、297.

69) この点については著者別稿を参照していただければ幸いである。

70) *The Alchemist*, II. iii. 198-200、小田島、291.

71) Herford and Simpsons, "Play Commentary," 47. Herford and Simpson, "The Alchemist," 99.

72) アキピウスについては、リコッティ、353-372 を参照。

73) *The Alchemist*, II. ii. 75-85. 小田島、276.

74) Abraham, 66-67.

75) *The Alchemist*, II. iii. 40. 小田島、280.

76) *The Alchemist*, II. iii. 192, 小田島 291.

77) Abraham, 73.

78) Abraham, 44

79) *The Alchemist*, II. ii. 42, 小田島 274.

80) *The Alchemist*, II. ii. 48-50, 小田島 274.

81) *The Alchemist*, II. ii. 51-53, 小田島 275.

82) Ripley, 56.

83) *The Alchemist*, IV. v. 29-34. 小田島、387-388.

84) Herford and Simpson, "The Alchemist," 87. 99-100.

85) *The Alchemist*, I. i. 111-114. 小田島、236. 森ゆかり別稿も参照。

引用文献

Abraham. Lyndy. *A Dictionary of Alchemical Imagery*. Cambridge: Cambridge University Press, 1998.

Ashmore, Elias. *Theatrum Chemicum Britannicum*. 1652 Rept. Kila, Montana: Kessinger Publishing, n.d.

Chaucer Geoffrey. *The Riverside Chaucer*. Ed. Larry D. Benson. Third Edition. Oxford: Oxford University Press, 1987.

チョーサー『カンタベリ物語（下）』 西脇順三郎訳 東京：筑摩書房、１９８７年

Clulee, Nicholas H. *John Dee's Natural Philosophy: Between Science and Religion*. London: Routledge, 1988.

Crisciani, Chiara and Michela Pereira. "Black Death and Golden Remedies: Some Remarks on Alchemy and the Plague." *The regulation of Evil: Social and Cultural Attitudes to Epidemics in the Late Middle Ages*. Ed. Agostino Paravicini Bagliani and Francesco Santi. Florence: Societa Internationale per lo Studio del Medioevo Latino, 1998. 7-39.

アレン・G・ディーバス 『近代錬金術の歴史』東京：平凡社、１９９９年。

B. J. T. ドブス 『ニュートンの錬金術』東京：平凡社、１９９５年。

Duncan, Edgar H. "Jonson's Alchemist and the Literature of Alchemy." PMLA 61 (1946): 699-710.

----------. "Jonson's Use of Arnold of Villa Nova's *Rosarium*" *Philological Quarterly* 21 (1942): 435-438.

Elton, G. R. *The Tudor Constitution: Documents and Commentary*. Second Edition. Cambridge: Cambridge University Press, 1982.

Feingold, Mordechai. "The Occult Tradition in the English Universities of the Renaissance: A Reassessment." *Occult and Scientific Mentalities in the Renaissance*. Ed. Brian Vickers. Cambridge: Cambridge University Press, 1984. 73-94.

Geoghegan, D. "A Licence of Henry VI to Practice Alchemy." *Ambix* 6 (1957): 10-17. Harkness, Deborah E. *John Dee's Conversations with Angels: Cabala, Alchemy, and the End of Nature*. Cambridge: Cambridge University Press, 1999.

Herford, C. H. and Percy Simpson. "The Alchemist," *The Works of Ben Jonson*. Volume II. Oxford: Clarendon Press, 1925. 87-110.

Herford, C. H., Percy and Evelyn Simpson. "Play Commentary: *The Alchemist*" *The Works of Ben Jonson*. Volume X. Oxford: Clarendon Press, 1950.

46-116.

Jonson, Ben. *The Works of Ben Jonson.* Volume V. Ed. C.H. Herford and Percy Simpson. Oxford: Clarendon Press, 1937. 46-116.

ベン・ジョンソン『ヴォルポーネ　錬金術師』エリザベス朝演劇集　II 小田島雄志訳 東京：白水社、１９９６年.

Juneja, Renu. "Rethinking about Alchemy in Jonson's *The Alchemist.*" *Ball State University Forum* 24 (1983): 3-14.

Kassell, Lauren. "'The Food of Angels': Simon Forman's Alchemical Medicine." *Secrets of Nature: Astrology and Alchemy in Early Modern Europe.* Ed. William R. Newman and Anthony Grafton. Cambridge, Mass: The MIT Press, 2001. 345-384.

Linden, Stanton J. "Commentary," *George Ripley's Compound of Alchemy (1591).* Ed. Stanton J. Linden. Aldershot: Ashgate, 2001. 101-130.

森ゆかり　「"For here, he doth not fear, who can apply" ベン・ジョンソン『錬金術師』におけるサイモン・フォーマン」　愛知工業大学研究報告 37A (2002)所収。

Mulryan, John. "Jonson's Classicism." *The Cambridge Companion to Ben Jonson.* Ed. Richard Harp and Stanley Stewart. Cambridge: Cambridge University Press, 2000. 163-174.

Newman, William R. *Gehenical Fire: The Lives of George Starkey, an American Alchemist in the Scientific Revolution.* Cambridge, Mass: Cambridge University Press, 1994.

Norton, Thomas. *Thomas Norton's Ordinal of Alchemy.* Ed. John Reidy. Early English Text Society No. 272. London: Oxford University Press, 1975.

Pereira, Michela. "'Mater Medicinarum': English Physicians and the Alchemical Elixir in the Fifteenth Century." *Medicine from the Black Death to the French Disease.* Ed. Roger French, Jon Arrizabalaga, Andrew Cunningham and Luis Garcia-Ballester. Aldershot: Ashgate, 1998. 26-52.

Principe, Laurence M. *The Aspiring Adept: Robert Boyle and his Alchemical Quest.* Princeton: Princeton University Press, 1998.

Reidy, John. "Introduction," in *Thomas Norton's Ordinal of Alchemy.* Ed. John Reidy. Early English Text Society No. 272. London: Oxford University Press, 1975.

エウジェニア・サルツァ・プリーナ・リコッティ　『古代ローマの饗宴』東京：平凡社、１９９１年。

Ripley, George. *George Ripley's Compound of Alchemy (1591).* Ed. Stanton J. Linden. Aldershot: Ashgate, 2001.

Traister, Barbara Howard. *The Notorious Astrological Physician of London: Works and Days of Simon Forman.* Chicago: The University of Chicago Press, 2001.

Webster, Charles. "Alchemical and Paracelsian Medicine." *Health, Medicine and Mortality in the Sixteenth Century.* Ed. Charles Webster. Cambridge: Cambridge University Press, 1979. 301-334.

(平成１４年３月１９日受理)